



十四代が独自に追求する唐津焼き「白地黒掻落し」



唐津藩の御用窯として使用された国指定史跡「唐人町御茶壺窯」



「白地黒掻落し」の技法を用いた壺を制作中の太郎右衛門さん



現在使用している登り窯



十四代太郎右衛門の「タ印」(サイン)



「叩き」の技法に使用する叩き板



十四代
中里 太郎右衛門
14th Tarouemon Nakazato

1957年
十三代中里太郎右衛門
の長男に生まれる。
1983年
十三代中里太郎右衛門
陶房にて作陶を始める。

- 駐車場 (7台)
- 作業風景見学
- 体験教室
- 要連絡

窯印・作家印▶

中里太郎右衛門陶房

十

三

古に向き合い、努力を重ねる。

唐津焼の由緒ある歴史を受け継ぐ、中里家の当主十四代。生まれたときから唐津焼に触れ、古い唐津焼には優れたものが多いことを実感する。「現代は唐津焼をつくる環境は良くなっているが、良い物は少なくなっている。古の方々の精神の違いでしょうか。それでも、良いものをつくる努力を続けていくことが大切」と語る太郎右衛門さん。

取材時には、掻き落とし技法による意欲作を見せていただいた。題材は「夏野菜」。「今晩はカレーかな」と、少年のような笑顔で話す太郎右衛門さんが印象的だった。作陶中のプロフェッショナルな鋭い視線とは対照的に、いつもは優しく、気さくな方なのだ。

